

標記授業科目は力学の範疇にあり、金属材料などの物体が外力を受けるときの応力や変形について、工学部材料工学科2年生約40名を対象に、平成15年度前期に講義しました。私はこの年の4月に助教授に昇進したので、授業を担当するのはこれが始めてでした。今回、たまたま学生アンケートの結果が良かったことからこの記事の執筆依頼を受けましたので、授業に関する私見を述べさせて頂く次第です。

大学教員に求められる重要な仕事は教育、研究、社会貢献だとよく言われますが、これらは等価ではないようです。大学当局が毎年実施する個人業績点検評価調査では、研究論文発表や特許出願の数の他に学会などでの役職について詳しく問われますが、授業については、何単位分を受け持っているかという調査項目があるだけで、学生は理解したかなど具体的成果に関する問いはありません。つまり、授業内容の善し悪しは、教員個人の業績評価の材料とはなっていません。そのためか、授業に心血を注ぐ教員はあまりいないようです。私の場合も、労力と時間を最も多く使う仕事は授業ではなく、研究です。この研究を通して、研究室内の大学院生を対象に個人指導形式で研究者教育を行うことが、少なくとも私が所属する大学院工学研究科の場合、教育的側面を持つ仕事の中で最も重要なものであると理解しています。

しかし、学部生を対象に行った授業のアンケート結果が今回たまたま良かった原因について多少思い当たるところもありますので、以下に紹介させて頂くことにします。私は、学会などで自分の研究成果を講演発表することに大きな喜びを感じています。できる限り良い発表にするため、内容、構成、スライド、言葉使い、態度、服装などについて、まるで舞台芸術の脚本家か監督のようにあれこれと工夫を重ね、最後に自分が主演して完成させる、というプロセスが好きです。このたび授業を受け持つようになって、講演発表におけるこのプロセスはすべて授業にも当てはまると気付きました。つまり、私にとって授業は喜びの感じられる大変好きな仕事で、毎回教室に行くのを楽しみに思っていました。私が授業を楽しんでいることを学生たちは感じ取っていたと思います。これが原因の第一ではないかと思います。

第二の原因として思い当たることは、授業中、学生と対話する場面がかなり多かったことです。私の質問に対して学生たちが手を挙げて正解を競う光景はまるでクイズかゲームのようで、とても盛り上がりました。真っ先に正解を答えた学生はきっと気分が良かったと思います。

第三は、毎週必ず宿題を出したことです。学生はいやがるかと思いましたが、全く逆でした。毎回1、2題の宿題を提出させ添削して次回に返しましたが、採点された宿題を受け取る学生たちの様子を見ると、苦労した分だけ充実感や達成感を持ったように見えました。授業出席率や宿題提出率は、ほぼ100パーセントでした。

以上、授業に対する私のスタンスや進め方について述べさせて頂きました。新米助教授が生意気なことを書いたかも知れませんが、共感を持って頂ける部分が少しでもあるなら幸いに思います。